

# 河北省南宮市後底閣遺跡出土唐代如来座像の 特質とその背景

小澤 正人

## はじめに

中国の仏教造像には、特に唐代以前において、様式の大きな変化が度々起こっている。仏教が定着・普及する5世紀末から6世紀初頭には造像にも中国的な表現が取り入れられ、西方からもたらされた仏像は変容し、「中国化」と呼ばれるような大きな変化が起こった。ところが6世紀後半には再びインド・中央アジア的な造像表現が導入され、新たな様式へと移行してゆく。このような造像様式の変化の背景には、各時代で求められた仏像のイメージの変化があったと考えられる。理想とする如来や菩薩の姿が変わったことで、造像様式は大きく変化していったのである。

ただし、大きな様式の変化は同時かつ均一に広がったのではなく、地域によりその現れ方には違いが存在する<sup>1)</sup>。すなわち新様式との接触の強弱、在地の伝統との関係などにより、変遷過程や生み出された造像には地域性や多様性が認められる。中国における仏教造像の理解には、このような視点が不可欠であり、これまでも多くの研究の蓄積がなされてきた<sup>2)</sup>。特に近年では小型の石窟を対象とした調査の進展、考古学的な発掘を経た資料の蓄積などにより、より微視的な検討を行う条件が整いつつある。

本稿はこのような微視的視点からの仏教造像理解の試みとして、河北省南宮市後底閣遺跡出土の唐代造像を取り上げ、造像の特質とそれを生み出した背景を検討するものである。この遺跡では多くの造像が出土しているが、本稿では上記の目的のために、像高60cm以上の如来座像で、かつ紀年銘から製作年代が判明しているものに対象を絞り、検討をおこなってみたい。

## 1 対象造像の検討

河北省南宮市は省都である石家荘市の中心から東南約 100km、山東省に隣接し、華北平原に位置している。この南宮市の東南部に位置する後底閣村で、2006 年に農民が偶然石像を発見したことを契機に発掘調査が行われた。その結果この後底閣遺跡は総面積 130 万 m<sup>2</sup> にのぼる大型の遺跡であることが判明した。調査簡報では、大量の瓦やレンガが出土し、さらに遺跡の西北・東南部に墓地が分布することから、南北朝時代から隋唐時代を中心とした都市遺跡の可能性を指摘している。

この後底閣遺跡の 16 号土坑（番号：H16）から大量の仏教造像が出土した。16 号土坑の形状は不整な長方形で、長さ 2.4m、幅 2.0m、開口部からの深さ 1.1m を測り、仏像 283 点（破片を含む）が出土した。周辺からは鴟尾破片を含む瓦片、レンガ、壁体出土し、さらに隣接して建物基壇が検出されたことから、報告者は 16 号土坑を含む地点を寺院跡と考えている。

本稿ではこの 16 号土坑から出土した紀年銘をもつ造像 3 体を対象とする。以下年代に沿って、各造像の概略を記す<sup>3)</sup>。

### (1) 韓善行等五十人造如来座像（後底閣 002 号像）（第 1 図 1～3）

この像は白玉製で、像高 91.7cm を測り、造像と台座に分けることができる（以下「韓善行等造像」とする）。

造像は結跏趺坐している。頭光は円形で上半部が欠損している。突線により三重に区画され、内区は浮き彫り状の二重蓮弁文、中区は円形と菱形の連珠紋、外区は火炎文で飾られる。頭部は楕円形で、面長。螺髪で、髮際正面は波打っている。肉髻は幅が狭く、高く表わす。額には白毫相を表わす。眉は幅広の刻線で表現されている。眼は波打っており、上瞼が垂れ、半眼となり、下瞼も表現されている。耳は大きく、耳垂は長く、首にまで達している。鼻はやや幅広で、鼻筋が通っている。頬はあまり高くなく、口は小さく、唇は厚めである。首には三道を刻線で表わす。

胴部は肩幅が広く、やや後方にそって座す。内衣として僧祇支を纏い、胸下を紐で締める。胸と胸下には肉体のラインが彫られている。僧祇支

の上に両肩を隠すように袈裟を纏う。袈裟は左肩で吊り紐に結んでいる。両足は前方に垂れる着衣で隠されており、僅かにその形をうかがうことができるのみである。着衣の襞は自然な流れになっている。両膝は少し上がっている。着衣は蓮台上に留まり、垂下しない。右腕は欠損している。左手は左膝に伸びる。

台座は方形の基壇部分とその上の蓮華座部分に分かれる。蓮華座部分は中央の八角方柱の上下に、蓮台を設ける。八角柱の周囲には2体の力士と8本の方柱が彫られている。八角柱上方の蓮台は上向きで、二重の蓮弁となっている。下方の蓮台は下向きの複蓮弁となっている。基壇部分には235字が刻まれる。冒頭には「□唐龍朔□年歲次癸亥六月壬癸望廿九日辛亥大象主雲騎尉韓善行隊下五十人等……」とある。龍朔年間で歲次が癸亥の年は龍朔3（663）年であり、この年が製作年代と考えられる。また銘文からは造像主が韓善行を中心とした50人であったことが知られる。

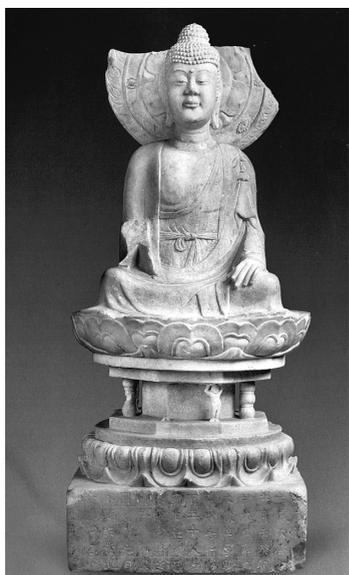
## (2) 賈士達造阿弥陀座像（後底閣001号像）（第1図 4～6）

この如来座像も白玉製で、像高は90cm、造像部分と台座部分からなる（以下「賈士達造阿弥陀像」とする）。

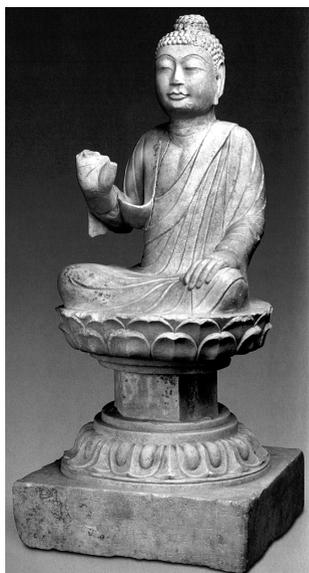
造像は蓮華座に結跏趺坐している。頭部は面長だが、韓善行等造如来座像よりはやや頬がふくらむ。螺髪で、髮際正面は直線状である。肉髻は幅が狭く、高く表わす。額には白毫相はなく、眉は刻線で表現されている。眼は半眼であるが、輪郭線は直線状。耳はやや大きめ。頬の彫りはあまり深くなく、唇は厚めである。首には三道を刻線で表わす。姿勢は後方にそっている。胴部は細い。内衣として僧祇支を纏っている。袈裟は両肩を覆い、先端は左肩に懸かる。左右の前臂に袈裟が懸かる。両足は前方に垂れる着衣で隠されており、僅かにその形をうかがうことができるのみである。着衣の襞は刻線で表現され、自然な流れになっている。両膝は少し上がっている。着衣は蓮華座上に僅かに懸かるが、垂下しない。右腕は先端を欠損するが施無畏印を結んでいる。左手は左膝に伸びる。

台座は方形の基壇部分とその上の蓮華座部分に分かれる。蓮華座部分は中央の六角方柱の上下に、蓮台を設ける。六角方柱の各面には方柱が彫られているが、いずれも欠損している。八角柱上方の蓮台は上向きで、

韓善行等造像



賈士達造阿弥陀像



第1図 後底閣遺跡16号土坑出土造像

二重の蓮弁となっている。下方の蓮台は下向きの複蓮弁となっている。基壇には134字が刻まれる。冒頭には「上元元年正月一日賈士達敬造弥陀一軀……」とある。この銘文から、この造像の制作が上元元(674)年で、尊像名が阿弥陀仏であることがわかる。

(3) 韓善行等五十人造阿弥陀座像(後底閣003号像)(第2図)

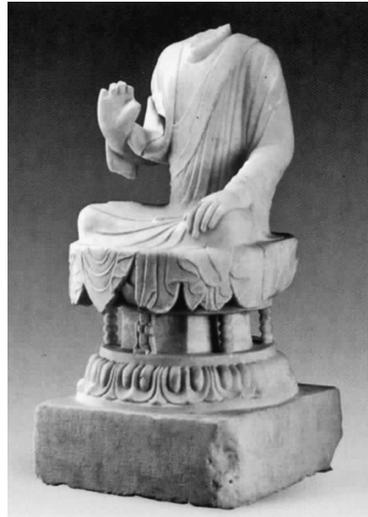
この像も白玉製で、頭部を欠損している(以下「韓善行等造阿弥陀像」とする)。全高72.5cmを測る。造像と台座部分からなる。

造像の形状は、ほぼ前述の賈士達造阿弥陀像と同じである。ただし着衣が台座から垂れ下がる点異なる。

台座も基本的には賈士達造阿弥陀像と同じであるが、支柱が円珠となっている点、正面に力士がいる点が異なっている。基壇部分には400字余りが刻まれている。銘文の冒頭には「唯大唐調露元年十月八日、大像主宣勇師上柱国韓善行隊下五十人等奉勅東征、敬造弥陀像一軀并二菩薩、上為天皇天后下為七世先亡……」とある。この銘文から造像主の中心が韓善行であることがわかる。この人物は前述した韓善行等造像の造像主の中心人物と同姓同名であり、同一人物である可能性が高い。また造像が調露元(679)年であることがわかる

## 2 造像の変遷過程

以上が本稿で対象とする造像の概要である。その製作年代は最も早いもので663年、最も遅いもので679年であり、大まかには7世紀後期前半に属す。これら造像はいずれも像本体と台座部分から構成されており、自立できるようになっている。また銘文からは制作者が供養のために発願したことがわかり、いずれも寺院址と考えられる場所から出土してい



第2図 韓善行等造阿弥陀像

る。以上の点から、対象とした造像は供養のために寺院に納められていたものと考えられる。

以上の年代と性格をふまえた上で、次にこの3体の造像の特徴と変化の具体的な様相を検討してみたい。第3図は対象となる造像の特徴をまとめたものである。

まず製作年代が最も早い韓善行等造像について、その特徴をまとめる以下ようになる。

- ① 造像の全体の姿勢はやや後ろにそっており、顎を引いている。右手は膝近くまで下げ、左手は膝に乗せている。着衣は僧祇支と袈裟で構成される。袈裟は両肩を覆っているが、胸元を腹部まで大きく開けており、僧祇支がはっきりと見える。また袈裟は両足を足先まで覆っており、脚部の存在はほとんどうかがえない。着衣は蓮台上部に留まって、周囲には垂下しない。僧祇支は胸元を紐で縛る。袈裟は左肩を紐で吊る。
- ② 頭部は面長で、幅が狭い螺髪肉髻。眉は刻線で表現。眼の輪郭は波打っており、半眼、下脛を表現する。鼻はやや幅広く、耳は長い。首には三道が見られる。
- ③ 台座は蓮華座と方形基壇から構成される。蓮華座は方柱の上下に蓮台を配する。方柱の周囲には連珠状の支柱と力士が配置される。下部の蓮台は複連弁である。

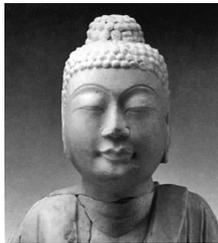
これに続くのが670年代前半の賈士達造阿弥陀像である。その特徴を上記の韓善行等造像と比較しながらまとめると以下ようになる。

- ① 全体の姿勢はやや後ろにそり、同時に顎を引いており、韓善行等造如来像と同じ。左手の位置は同じだが、右手は高く上げている。着衣を僧祇支と袈裟で構成し、袈裟が両肩を覆う点は同じだが、袈裟が身体に密着し、右腹下部から左肩にかけての胴部を大きく覆っており、僧祇支はわずかに胸部で確認できるのみで、この点は韓善行等造像と大きく異なる。また右前膊に懸かった袈裟がそれ以上垂下していない表現は特徴的である。袈裟が両足を覆い脚部がうかがえない点、着衣が蓮台状に留まり垂下しない点は韓善行等造像と同じである。僧祇支を縛る紐、袈裟を吊る紐などは表現されない。
- ② 頭部は韓善行等造像に比べると頬が張るようになり、丸みを帯びるようになる。肉髻や眉は韓善行等造像と同じ。眼は半眼だが、輪郭

韓善行等造像 龍朔3 (663) 年



賈士達造阿弥陀像 上元元 (674) 年



韓善行等造阿弥陀像 調露元 (679) 年



第3図 造像の比較

線は直線になり、下脛も表現されないなど、やや簡略化されている。鼻は小さくなり、耳は短くなっている。首には三道が見られる。

③ 台座の構成は韓善行等造像と同じ。ただし方柱の周囲が支柱のみである。

最後に670年代後半の韓善行等造阿弥陀像の特徴は以下の通りである。

① 基本的な像容は賈士達造阿弥陀像と同じ。ただし着衣が蓮台から垂下している点が異なる。

② 台座の構成も賈士達造阿弥陀像と同じ。ただし方柱の周囲に力士が彫られており、賈士達造阿弥陀像よりも韓善行等造像に近い。

以上の検討をまとめると、次のようになる。後底閣遺跡では660年代には面長の顔で、胸元を大きくはだけた袈裟を纏い、蓮台に着衣を垂下させない造像が製作された。しかし670年代前半になると像容は大きく変化し、頭部は丸みを帯び、身体に袈裟を密着させるようになる。このような像容は670年代後半になっても変化しない。但し袈裟を蓮台から垂下させるようになるといった変化が生じている。

なお賈士達造阿弥陀像と韓善行等造阿弥陀像は像容がほぼ一致しており、さらに年代も近いことから、同一工房の作品の可能性が高いと考えられる。

#### 4 華北平原地域における造像の変遷

以上が後底閣遺跡出土造像の特徴とその変化の様相である。次にこの様相を南宮市も含まれる華北平原地域の一般的な造像と比較することで、本稿で対象とした造像の特質を明らかにしてみたい。そのためにまず華北平原地域における造像様式の変遷について概観する<sup>4)</sup>。

6世紀前期前半の北魏時代には「秀骨清像」と呼ばれる中国化した造像様式が華北平原地域を含む広い地域に普及する。この造像様式は前期後半にあたる東魏時代に変化をはじめ、やがて後期前半を占める北齊時代には異なった様式として確立される。第4図1・2に示した河北省南部で発見された趙郡王高叡造如来像はこの様式を代表する作例の一つである<sup>5)</sup>。その特徴としては、まず6世紀前期の中国式造像に比べ全体に

着衣が薄くなり、肉体が表現されるようになることが挙げられる。さらに頭部は丸みを帯び、肉髻が低く扁平で頭部との境界が不明瞭といった傾向も認められる。また肩幅が広がり、胸が厚くなることもこの時期の特徴である。総じて言えば6世紀前期の中国式とされる造像が人間的な肉体表現や動的表現を排して抽象的な表現の指向性を持っていたのに対して、6世紀後期前半の造像ではインドや中央アジアにおける本来の仏教造像が具えていた肉体表現や動的表現が認められ、写実的な表現が志向されるようになっていく。

このような造像は、6世紀後期後半の隋代に再び変化する。南宮市から東へ200km離れた山東省青州市雲門山石窟第1龕如来像はこの時期を代表する造像の一つである（第4図3）<sup>6)</sup>。その年代は開皇10（590）年頃と考えられる<sup>7)</sup>。この造像は頭部が面長で、肉髻が高く、また着衣も厚く、北齊時代の造像に比べ写実的な肉体表現への指向が後退しているように見受けられる。また結跏趺坐した脚部を着衣で足先まで完全に隠し、さらに両膝を高くし、その間に横方向で弧状の襞を彫る表現も北齊式にはない特徴である。この他、左肩で袈裟を紐で吊っているが、これも隋代以前の如来像には見られない着衣型式である。

同様な特徴をもつ造像は南宮市から160kmほど東の山東省済南市歷城区神通寺四門塔内造像<sup>8)</sup>にも認められる。四門塔では天井部の比較的大きな石版に隋大業11（615）年の年号を持つ刻字が見つかったことから、これが塔の落成年代と考えられ、造像もほぼこの年代と考えられる。造像は塔内四方に1体ずつ安置されており、第4図4・5はそのうち北側の造像である。先の雲門山石窟第1龕如来像同様にやや後ろに倒れてゆったりと座しており、高めの肉髻と面長の頭部、やや厚めの着衣と左肩で袈裟を吊る型式が認められる。さらに脚部を足先まで隠しており、膝の間には横向きの襞が彫られている。以上の表現は雲門山第1龕と共通しており、同一の様式に属している。

この他南宮市からやはり160km東南の済南市長清区蓮花洞石窟如来像にも同様の特徴が認められる（第4図6）<sup>9)</sup>。この如来像は肉髻が低く扁平で頭部との境界が不明瞭といった北齊式の特徴が認められるが、面長の頭部、厚めの着衣と袈裟を左肩で吊る型式、袈裟で足先までを隠し膝と膝の間に横方向で弧状の襞を彫るなどの表現は、先の如来像と同じである。



1 高叡造像（頭部）



2 高叡造像



3 雲門山第1龕造像



4 神通寺四門塔北面造像



5 神通寺四門塔北面造像



6 蓮花洞造像



7 大住聖窟東壁造像



8 龍門藥方洞造像

第4図 華北平原における北齊・隋代の造像



1 龍門賓陽南洞造像



2 龍門賓陽南洞南壁大龕造像



3 神通寺千仏崖明德造像



4 神通寺千仏崖趙王福造像



5 龍門敬善寺洞造像  
(頭部は後補)



6 龍門敬善寺洞造像  
(破損前)



7 龍門清明寺洞造像



8 龍門清明寺洞造像

第5図 華北平原における初唐期の造像

また南宮市から西南に180kmの河南省安陽市には隋開皇9(589)年開窟とされる大住聖窟がある<sup>10)</sup>。第4図7は東壁の如来像である。頭部は早くに失われているが、やや厚めの着衣を纏い、脚部を足先まで隠し、両膝の間に弧状の髻を刻むなどの表現は先の造像と同じである。

さらに南宮市から西南に400kmの龍門石窟では隋代の造像として薬方洞正壁の如来像がある(第4図8)<sup>11)</sup>。この像では蓮花洞如来像のように肉髻が低く扁平で頭部との境界が不明瞭といった北齊式の特徴をもつものの、面長の頭部、右肩に袈裟をかけ、僧祇支を紐で縛るなどの表現が採用され、着衣は厚くなっている。さらに脚部を足先まで隠し、両膝の間に弧状の髻を複数刻むといった表現が見られる。

以上のように、隋代の華北平原地域には、北齊時代の造像とは異なった様式が広く分布している。その共通点をまとめるならば、①面長の頭部、②厚めの着衣でしばしば左肩で袈裟を紐で吊る、③袈裟で脚部を足先まで隠し、横方向の壁を彫るといったことになる。

次に唐代の造像だが、まず7世紀前期後半貞観期の造像として、龍門石窟賓陽南洞奥壁如来像を挙げることができる(第5図1)。岡田建氏はこの造像について、北魏時代の賓陽中洞奥壁如来像を意識しながらも、隋代造像の特徴が色濃いと評価している<sup>12)</sup>。岡田氏の指摘の通り、この像には高い肉髻、面長の頭部、厚めの着衣、袈裟により隠された脚部と両膝間の弧状の髻、さらに左肩で袈裟を吊る着衣型式もあり、全体的には隋代造像の特徴を引き継いでいる。

この賓陽南洞奥壁如来像からやや遅れるのが、同じ賓陽南洞の南壁大龕の如来像である(第5図2)。この造像でも高い肉髻、面長な頭部、厚めの着衣、袈裟で脚部を足先まで隠す、といった像容に基本的な変化はない。ただし肉髻が幅広くかつ高くなっている点が特徴となっている。また蓮華座に座り、袈裟が垂下しない、といった点はさきの賓陽南洞如来像とは異なっている。

この造像と極めて類似するのが、神通寺千仏崖僧明徳造像である(第5図3)<sup>13)</sup>。この造像の基本的な像容はこれまで見てきた隋代以来の特徴を具えている。それに加えて高く幅広い肉髻、蓮華座に座して袈裟を垂下させない、といった特徴があり、賓陽南洞南壁大龕如来像との共通性が高い。僧明徳造像は銘文から貞観18(644)年作であることがわかっている。この年代は上記賓陽南洞南壁大龕如来像の想定年代と矛盾する

ものではなく、両者の間の密接な関連が伺える。

これに続く7世紀後期前半の造像としては、銘文から顕慶3(658)年に制作されたことがわかる神通寺千仏崖趙王福造如来像がある(第5図4)。この造像は脚部を袈裟で完全に隠し、横方向に髻を刻み、さらに左肩を袈裟で吊っており、これまでの造像の着衣型式同じである。ただし頭部は丸みを帯びており、やや変化が認められる。肉髻は貞観期の造像とは異なり、小さく低くなっている。しかし頭部とは段がついて明確に区分されており、頭部と一体化していた北斉式の造像とは異なっている。

660年代を代表する造像としては龍門石窟敬善寺洞如来像があげられる(第5図5・6)。この造像では脚部が袈裟に隠され、膝が高く、その間の袈裟の髻は弧状になっており、これまでの着衣型式を継承している。しかし頭部は上記の趙王福造如来像よりもさらに丸みを帯びている。さらに蓮華座に座るが、着衣が台座全面に垂下する表現もこれまでになかったものである。

続く670年代に入ると変化が生じる。この時期とされる龍門石窟清明寺洞如来像は、脚部を袈裟で包み込んでおり、袈裟を通して足がわかるようになっている(第5図7・8)。その他には明確な変化が認められないが、袈裟で脚部を隠す表現は隋代以来の伝統であり、そこに変化が生じた意味は大きい。脚部の形状がはっきりとわかることから、肉身表現への指向が再び強まった結果と考えることもできる。

## 5 後底閣遺跡出土造像の特質

以上、華北平原における如来座像の変遷を概観してきた。これを基に後底閣遺跡出土造像の特質を考えてみたい。

まず663年に製作された韓善行等造像だが、この像は高い肉髻、面長な頭部、袈裟で脚部を隠す、右肩で袈裟を吊る、袈裟が蓮台上に留まり垂下しない、などを特徴としている。このうち頭部については、7世紀後期の華北平原では龍門石窟敬善寺洞如来像に見られるように丸みを帯びたものへと変化していることを考えると、本像の面長な頭部は660年代の造像としてはやや古風なものに感じられる。さらに龍門石窟では650年代には袈裟を垂下させる表現が採用されているが、本像では蓮台

上に袈裟を留めており、この点でも新しい変化には追従していないことがわかる。以上の点に加え、本像が隋代以来の左肩で袈裟を紐で吊る表現を採っていることを考慮するならば、本像は7世紀後期前半の造像ではあるが、なお7世紀前期の特徴を保持した、保守的な性格をもつ像として位置づけることができる。

また韓善行等造像では脚部を隠す袈裟の襞を腹部から自然に流れるように彫っているが、華北平原では袈裟脚部の襞は横方向に彫られることが一般的であり、本像のような表現をとることは珍しい。この表現は後続する2体の造像にも継承されていることからすると、この地域の特徴である可能性が高い。

次に674年製作の賈士達造阿弥陀像である。この像の頭部は丸みを帯び、肉髻も小型で低めになっており、龍門石窟敬善寺洞如来像との共通点が認められ、本像が650年代以降の変化を反映したものであることがわかる。その反面、本像は袈裟で脚部を覆い隠す表現を採るが、670年代の龍門石窟では脚部を袈裟で包み、その輪郭を表現するようになっており、この点では時間的な遅延が発生していることになる<sup>14)</sup>。さらに袈裟は相変わらず蓮台上に留まり垂下しない。その意味では本像も保守的な様相を示しているといえる。

また賈士達造阿弥陀像では右腕に懸かる袈裟が膝まで垂下しないが、このような表現は華北平原では一般的ではない。ただし立像ではあるが、南宮市から北西に150km離れた河北省曲陽県修徳寺遺跡出土の如来像に同様の表現が見られる(第6図)。従ってこのような着衣表現は現在の河北省中部に広がっていた可能性が考えられる。

さらに本像は660年代の韓善行等造像に比べ全体に着衣が薄くなっている。しかし同時期の龍門石窟などでは着衣が薄くなる傾向は認められない。上記の袈裟の表現を地域性としたことを敷衍すれば、この着衣が薄くなるという変化も河北省中部の特徴と考えることも可能であろう。

次に679年製作の韓善行等造阿弥陀像だが、この像は頭部を欠損するものの、像容は先の賈士達造阿弥陀像とはほぼ同じであり、同一工房の作品と考えられる。両者の間の年代差が5年であることを考えると、同一工房で作成された造像の像容は容易には変化しないことがわかる。その反面、韓善行等造阿弥陀像では蓮華座に着衣が垂下しており、上記の龍門石窟での変化に追従していることになる。

ただし龍門石窟では袈裟を正面で三角形に大きく垂下させるが、本像では蓮台全体で均一に垂下させており、両者の表現には明確な違いがある。このことは、韓善行等造阿弥陀像の袈裟を垂下させる表現が龍門石窟で流行したものの直接的な模倣ではないことを物語っている。先の賈士達造阿弥陀像に河北省中部の地域性が認められることを考慮するならば、この台座の表現も河北省中部の地域性と考えることが可能であろう。

以上後底閣遺跡出土の各像について、隋・初唐の造像の変遷を踏まえて、その特徴を見てきた。最後にここまでの検討をまとめみたい。



第6図 曲陽出土如来像

### 結び～後底閣遺跡出土造像の検討から

華北の東部にあたる華北平原地域では、6世紀後期後半の隋代に入ると先行する北齊時代の造像から変化が生じる。北齊式の造像はインド・中央アジア的な造像や肉身表現を強く指向するもので、薄い着衣と写実的な肉体表現を特徴としていた。それに対して隋代の造像は写実性への指向は残しながらも、やや厚めの着衣を纏うなど肉体表現を抑制する指向性を持つ。特に面長の頭部と脚部を袈裟で足先まで隠す着衣表現を特徴としている。この隋代に成立した様式は7世紀前期前半の唐貞観期まで基本的には継承されてゆく。その後後期前半に入ると頭部が丸みを帯びるなどの変化が始まる。さらに後期後半の670年代になると脚部を袈裟で包みその輪郭を表現することに象徴されるように肉体表現への指向が再び強まってゆく。

この華北平原地域の変化を本稿で対象とした後底閣遺跡出土造像にあてはめると、全体的には上記の変化を忠実になぞっているが、同時に時間的な遅延が発生していることがわかる。660年代の韓善行等造像は7世紀前期の特徴を強く残しており、保守的な様相を示している。さらに670年代でも脚部を袈裟で隠す造像が製作されるなど、龍門石窟で見ら

れた大きな変化が明確な形では現れていない。

このような現象は、後底閣遺跡出土造像を製作した南宮地域の造像活動が、より先進的な地域の造像を受容する性格であったために起こったと考えられる。華北平原における7世紀代の造像活動の中心は龍門石窟に代表される洛陽地域と考えられる。従って南宮地域は洛陽地域が生み出した造像の変化を受容する立場にあったと考えるのが自然であろう。

同時に後底閣遺跡出土造像には洛陽地域には見られない特徴もある。例えば脚部を袈裟で隠す場合、一般的には横方向に髻を彫刻するが、後底閣遺跡出土造像では着衣の自然な流れに沿って髻が彫られている。また660年代に着衣が薄くなる傾向や右前膊に懸かった袈裟がそれ以上垂下しない表現などは、洛陽地域の造像には見られない。このことは南宮地域での造像の受容が、単に先進的な造像を複製するのではなく、それを咀嚼し、地域的な表現と折衷させるものであったことを意味している。上記の時間差はこのような受容過程によるものと考えられる。

ただしこのような地域的な変容を過大に評価することはできない。俯瞰的に見れば、華北平原地域においては斉一性が高い如来像が製作されていたのであり、上記の地域性とはその中での表現の違いに過ぎない。理想とする如来像の姿は基本的には一致していたのであり、それを再現するなかで、細部表現において違いが生じたに過ぎないのである。

冒頭で述べたとおり、本稿は微視的な視点からの造像理解の試みである。対象とした7世紀後期の河北省南宮地域の如来座像は、華北平原地域の斉一性の高い様式に属しながらも、地域的な特徴を具えており、本稿はこの斉一性と地域性の関係について記述を試みたものとなっている。筆者は中国における唐代以前の造像を理解するためには、本稿で試みたように斉一性と地域性の関係を視点とすることが有効であると考えており、このような視点からの検討を蓄積することが今後の課題である。

#### 注

- 1) このような様式が変化するときには多様な仏像が生み出されることについては、岡田健氏が指摘している。

岡田健「南北朝後期仏教美術の諸相」（曾布川寛・岡田健責任編集『世界美術大全集 東洋編 第3巻 三国・南北朝』小学館 2000年所収）

- 2) 仏教造像の地域性について早くに松原三郎氏が流派という考え方を示している。中国では宿白氏が様式という視点から造像の地域性を取り上げてい

る。近年では、石松日奈子、岡田健、八木春生の各氏もこの問題について検討を行っている。以下代表的なものを挙げる。

松原三郎『中国仏教彫刻史論』（吉川弘文館 1961年）

宿白「涼州石窟遺跡和“涼州模式”」（『考古学報』1986年第4期）

岡田健「長安初唐造像の展望」（『仏教芸術』177号 1988年）

石松日奈子『北魏佛教造像史研究』（ブリュッケ 2005年）

八木春生『雲岡石窟文様論』（法蔵館 2000年）

『中国仏教美術と漢民族化』（法蔵館 2004年）

『中国仏教造像の変容』（法蔵館 2013年）

- 3) 対象とする造像についての報告・図録は以下の通りである。

河北省文物研究所・邢台市文物管理处・南宮市文物保管所「河北南宮後底閣遺址発掘簡報」（『文物』2012年第1期）

河北博物院編『北朝壁画 曲陽石彫』（河北博物院基本陳列 文物出版社 2014年）

- 4) 造像の変遷の考察については、以下の著作を参考にした。

岡田健「龍門石窟初唐造像論 その一 太宗貞観期までの道のり」（『仏教芸術』171号 1987年）

「龍門石窟初唐造像論 その二 高宗前期」（『仏教芸術』186号 1989年）

「龍門石窟初唐造像論 その三 高宗後期」（『仏教芸術』196号 1991年）

八木春生『中国仏教造像の変容』（法蔵館 2013年）

肥田路美『初唐仏教美術の研究』（中央公論美術出版 2011年）

なお本稿での「華北平原」とは、太行山脈以東、淮河以北の平原地域と指す。

- 5) 河北博物院編『北朝壁画 曲陽石彫』（河北博物院基本陳列 文物出版社 2014年）

- 6) 常盤大定・関野貞『支那佛教史蹟』第1巻（仏教史蹟研究会 1925年）

- 7) この造像の年代については以前論じたことがある。

小澤正人「中国山東省における南北朝時代から唐代にかけての仏教造像様式の研究」（『鹿島美術財団年報（別冊）』27号 2010年）

- 8) 済南市博物館『四門塔與神通寺』（文物出版社 1981年）

- 9) 常盤大定・関野貞『支那佛教史蹟』第1巻（仏教史蹟研究会 1925）

中国石窟彫塑全集編輯委員會編『中国石窟彫塑全集 6 北方六省』（重慶出版社 2001年）

- 10) 常盤大定・関野貞『支那佛教史蹟』第1巻（仏教史蹟研究会 1925）

河南省古代建築保護研究所『宝山靈泉寺』（河南人民出版社 1991年）

中国石窟彫塑全集編輯委員會編『中国石窟彫塑全集 6 北方六省』（重慶出版社 2001年）

- 11) 本稿の龍門石窟造像については以下のものを参照した。

水野清一・長広敏雄『龍門石窟の研究』（東方文化研究所報告第16冊 座右宝刊行会 1941年）

龍門文物保管所、北京大学考古系編『中国石窟 龍門石窟』2（平凡社 1988年）

中国石窟雕塑全集編輯委員會編『中国石窟雕塑全集 2 龍門』（重慶出版社 2001年）

また薬方洞の年代については岡田氏による比定に依った。

岡田健「龍門石窟初唐造像論 その一 太宗貞観期までの道のり」（『仏教芸術』171号 1987年）

12) 前掲注11 岡田論文参照。

13) 本稿の神通寺千仏崖造像については以下のものを参照した。

常盤大定・関野貞『支那佛教史蹟』第1巻（仏教史蹟研究会 1925）

済南市博物館『四門塔與神通寺』（文物出版社 1981年）

中国石窟雕塑全集編輯委員會編『中国石窟雕塑全集 6 北方六省』（重慶出版社 2001年）

14) 後底閣遺跡や南宮地域では脚部を袈裟で包む如来像は出土していない。やや範囲を広げれば、南宮市に南接する清河県で出土した長安3（703）年の銘をもつ孫四朗造像がこのような表現を採っている。なお河北省中部という範囲で見れば、保定市域で出土した唐長寿3（694）年製作の苑神造如来像に脚部を袈裟で包む表現が見られる。

河北省博物院編『北朝壁画 曲陽石窟』（河北博物院基本陳列 文物出版社 2014年）参照。

## 図版出典目録

第1・3図 河北省文物研究所・邢台市文物管理处・南宮市文物保管所「河北南宮後底閣遺址発掘簡報」（『文物』2012年第1期）

河北博物院編『朝壁画 曲陽石窟』（河北博物院基本陳列 文物出版社 2014年）

第2図 河北省文物研究所・邢台市文物管理处・南宮市文物保管所「河北南宮後底閣遺址発掘簡報」（『文物』2012年第1期）

第4図 1・2：河北博物院編『朝壁画 曲陽石窟』（河北博物院基本陳列 文物出版社 2014年）、3：常盤大定・関野貞『支那佛教史蹟』第1巻（仏教史蹟研究会 1925）、5～7：中国石窟雕塑全集編輯委員會編『中国石窟雕塑全集 6 北方六省』（重慶出版社 2001年）、8：龍門文物保管所、北京大学考古系編『中国石窟 龍門石窟』2（平凡社 1988年）

第5図 1・2・4・7・8：龍門文物保管所、北京大学考古系編『中国石窟 龍門石窟』2（平凡社 1988年） 3・5：常盤大定・関野貞『支那佛教史蹟』第1巻（仏教史蹟研究会 1925） 6：常盤大定・関野貞『支那佛教史蹟』第2巻（仏教史蹟研究会 1925）

第6図 故宮博物院編『故宮博物院藏品大系 雕塑編7 河北修徳寺遺址出土佛教造像』（紫禁城出版社他 2009年）

#### 附記

本論は以下の研究補助金による研究成果の一部である。

科学研究費補助金（基盤研究（C）「統一様式としての「初唐美術様式」の形成—地域性の喪失に注目して」（研究代表者八木春生 2010～2012年度）

成城大学成城大学特別研究助成（平成2012・2013年度）「中国華北東部地域における南北朝時代から唐代の仏教造像様式の研究」（研究代表者：小澤正人）